

ローカル鉄道応援酒『鐵の道』の試み(前編)

佐藤 建吉
(一般社団法人洗楓座主宰
千葉大学大学院工学研究科)

地方の復権こそが 日本の再生につながる

日本人にはベクトルの向きが一致すると何でもできるという底力があ
る。それは、努力するということ、工夫し、何事かについても道をつく
り出すということである。日本人のもつ繊細さと手工の振る舞いであ
る。それは、困難を工夫し、夢や望みを実現させる「工」の営みでもあ
り、「文化」といつてもいい。今こそ、日本が地方に内在するその「文化」
を活性化するときである。

地域活性化にこだわる

私の心底

本稿では表題のように、ローカル鉄

道とその沿線の酒蔵のコラボレーショ
ンによる地方の地域活性化をめざす一
つの手法について述べます。
ローカル鉄道と日本酒。この両者
は、衰退しつつあるもの、あるいは、

衰退したものの代表ともされ、時には
消えても仕方がない、などと言う人も
いるようです。
しかし、このローカル鉄道は地域が
求め敷設し、日本酒は地域がその独特
の味わいとして造り出したものであ
り、それらには、いずれも地域の歴史
が隠されている、としても過言ではあ
りません。
ここで述べる地域活性化の手法は、
それらを消さないようにし、新しい時
代に継続させることが必要であり、地

域や日本の伝統や歴史に準じて、軽々
に今日の動きには迎合せず、むしろそ
うした動きを逆手にとるミッションで
あるとも言えます。

すなわちそのミッションは、ローカ
ル鉄道の存続と、日本酒の衰退を回避
して、自然を大切に、地方の良さに
愛着をもち、また地方の人々の日常の
努力を大切に、地域内外の多くの人
が、それを共有することを確立するこ
とであると言えます。

私は現在、大学の工学部に勤務して
教育と研究という課業の他に、こう
した地域活性化を課題に掲げておりま
す。すると、地域活性化は、私の分野
とは別であると、しばしば思われがち
です。が、実はこれまで経験してきた
研究を活かせる対象が、「日本の再生」
地方の復権」の課題であると、私自身
が理解したからにはかなりません。
それは、これまでの経験やこだわり
が、そうした理解を導いたものです

が、ここでは、そうした意味合いを、
本稿で述べたいと思います。

そのキーとなるものの一つは、「シ
ステム」という言葉であり、もう一つ
は「できる状況づくり」という言葉で
あり、さらには「フレッティング疲労」
という破壊現象に関係しています。

それらが、「私の地域活性化のミッ
ションの心底」であると言えますが、
さらに最も重きをもつ「心底」は、「私
自身が、地方の、とりわけ田舎の生ま
れ、田舎育ちである」ということにほ
かなりません。

それでは、まずこの心底から紐解き
たいと思います。

変貌する日本のふるさと

私は、山形県鶴岡市の関根という市
街からバスで1時間もかかる山間部に
生まれました。終戦5年後のことです
。通学した小学校は「田川小学校開

根分校」で、同級生は20名ほどでした。
1年生から4年生までを分校に通いま
した。
冬になると積雪で、分校にも通えな
くなるさらに辺地の同級生が7人もお
り、冬季分校が3つも出来る田舎でし
た。

5年生からは全員が本校に通うこと
になり、2クラスになりましたが、徒
歩通学で1時間はかかるところに本校
はありました。中学は、隣接する「田
川中学校」に上がりました。

さらに、その田舎について紹介す
ると、四方が山並みに囲まれていま
すが、幅4〜5メートルの川が平地
を縫うように流れていました。夏にな
ると、親たちが川をせき止めて長さ25
メートルくらいはある水泳場をつくっ
てくれました。こうして水泳は遊びで
覚えたので得意になりました。

我が家の目の前には県道がありまし
たが、その下を流れる同じ川には、2